

『韓国出版学の史的研究 韓国出版学会 30 年史』
(韓国出版学会 30 年史編集委員会編, 社団法人韓国出版学会, 2000)

第 3 部 出版学研究の成果と将来設計
韓国出版学会の研究成果とその位相を中心に

出版学研究成果に関する理解 - 韓国出版学会学会誌を中心に

夫吉萬 (Booh Gil Man)

1. はじめに

学会誌に掲載された研究内容は実に多様であり, 学会が創立された 1969 年 6 月から 1999 年 6 月までの 30 年間の研究論文は総計 281 本にも達している。

その中で最も多い研究分野は出版総論, 方法論, 出版教育論, 出版文化論, 出版史などを扱っている「出版理論」分野であり, 281 の論文のなかで 55 論文 (割合 19.6%) がそれである。二番目に多い分野は著者・著述論, 書誌・文献論, 出版批評・書評論などを扱った「図書論」の分野であり, 全体の 15.0% を占めている (42 本)。三番目は, 出版流通, 出版広告などを含めている「出版経営・出版産業論」分野であり, この分野割合は 13.9% である (39 本)。

この三つの分野, 即ち「出版理論」, 「図書論」, 「出版経営・出版産業論」に関する研究が最も旺盛に行われてきた研究であり, 各領域別に 30 本を超えていることから 30 年間毎年 1 編以上の論文が発表されたとみなすことができる。つまり研究者たちの関心が集中していた分野であるともいえるであろう。

そして四番目は「国際出版論」8.9% (25 本), 次は「著作権法・出版倫理」分野 8.5% (24 本), 六番目は「出版状況論」8.2% (23 本), 七番目は「編集・制作論」分野と「読書・読者論」で各 6.0% (17 本) である。八番目は「雑誌論」5.7% (16 本), 九番目は「教科書論」分野で 4.3% (12 本), そして最後は「電子出版論」分野で 3.9% (11 本) である。

しかし, 5 番目の「著作権」分野は 1980 年代後半に韓国が世界著作権条約に加入してから研究が集中しているので, 実際的な研究比重はこれより高いとみることが妥当であろう。

そして最も少なかった分野である「電子出版論」の分野はその分野自体が新しく最近の 10 年間の研究結果から出された統計結果であるため, 実際の研究比重は高いと見える。そして今後の研究でもより重要な研究分野となる見通しである。

2. 出版学研究の成果が持つ意味と特性

韓国出版学会を中心に行われた出版学研究の成果は、出版学を学問の一つとして位置付ける過程で次のようないくつかの特性を帯びることになった。

- 第 1 韓国の出版学の学問的定立は出版文化を発展させようとする使命感と文化意識を持った出版界の実務者によって始められたということである。これは出版の理論化、出版の科学化を通じて韓国の出版文化を発展させようとする意志の表明でもあった。
- 第 2 このような問題意識は実質的で具体的な出版の諸問題に関心を持たせることになり、その問題解決のための理論化作業を強調したものとして表れた。
- 第 3 出版は社会科学、人文科学、理工学、芸術論等々様々な分野に関連性を持っているので、出版学の研究も広範囲で多様な形で展開されたことを出版研究の特性の一つとしてあげることができる。
- 第 4 出版学研究は新しい著作権環境、新技術の発達など変化する出版界状況に応じてその対処方策を工夫し、出版の目指すべき方向を提示する役割を果たしてきたことにその意義を求めることができる。

このような韓国出版学研究の意義と特性に関する認識をもとに、1969 年学会創立以後 30 年間の出版学の研究成果を 1982 年を基点に第 1 期と第 2 期に分けて照明してみることにする。

第 1 期は韓国の出版学の開拓期で、この時期の目立つ特徴は次のように説明できる。

- 第 1 出版を学問的に引き上げる開拓者の業績を積み重ねた時期。そして出版教育の方法論の開発に力を入れ、大学での学科新設を提唱し 2 年制大学と大学院の修士課程ではある程度成果をあげることができた。大学での出版教育に関しては大学と政府当局に対する説得とともに出版産業界自らが出版学科の必要性を要求する雰囲気醸成するようにしなければならない。最近の統計によると、韓国出版産業界の出版社上位グループの個別売上額や純利益が中央日刊紙や全国チャンネルの放送局並の規模に成長したという。これからは韓国の出版産業界も外的な成長だけではなく質的向上をともに目指すべきであろう。そしてそのために 4 年制大学に独立した出版学科が開設されることによって優秀専門人材の育成と出版学の発展を加速させる制度として作動させなければならない。
- 第 2 出版学研究は所期から実際的な問題に興味を持ち、出版の全過程に関する理論化あるいは体系化のための研究成果を出してきた。これは出版文化発展のための実践的な関心の実現であるとみることができるが、一方、出版研究が技能的・実務的あるいは微視的観点に止まっているという指摘もある。ただし、これまでの実践的研究は体系的な知識を持ってないまま「勘による出版」、「肩越しで学ぶ出版」に依存してきた韓国の出版界を発展させようとした一試みとして高く評価すべきである。このような実践的関心の実現は第 2 期に入り出版産業界の活性化のための研究、変化する出版環境に合わせて適切な対案を提示し、未来の方向を提示する先駆的研究として発展する知的な基となったことにその意義がある。

第 3 読書および読者研究を通じて出版文化研究を拡張させた。読書の問題は出版だけの問題ではなく、教育においても大事な研究対象である。教育期間に比例して読書能力と読書時間が伸びないのは問題である。読書に関する研究は第 2 期に入ってからより深まるようになったが、今後の研究においても学生たちの学習能力強化という側面とともに全国民の生涯教育という観点からより重点を置くべきであろう。

第 4 出版史研究において多くの成果をあげている。歴史研究は学問の成立のための基礎である。その点からみても出版学の定立のために努力してきた研究者たちが早くから出版史研究に熱心に取り組んできたのはある意味当然とも言えるであろう。

第 5 初期の研究者たちは書誌学的研究にも多くの業績を残している。その中でも安春根氏の『佛教書誌考』は日本語版にも翻訳され、韓国書誌学を外国に紹介した国際的な業績となった。

第 2 期は出版学の発展期に該当する。主な特徴は次のようである。

第 1 第 1 期に始まった出版学の定立のための研究がより深まり、さらに幅広くなった。それによって研究方法論や教育方法論に関する研究が強化された。

第 2 出版研究の初期から出版の実践的な問題に関心を寄せてきた出版学研究の伝統は、第 2 期に入ってから出版産業の活性化のための研究に集中するようになり、多くの研究成果をあげ、韓国出版産業の発展に寄与した。

第 3 1980 年代後半、韓国が UCC に加入するなど著作権環境が変わることにより、それに関する研究が活発に展開されることになった。それらの研究によって出版界の今後の展望や対処方策などが先駆的に提示された。

第 4 教科書に関する研究がさらに強化されることによって、教科書の編集体制改善および望ましい出版政策を樹立するための対案を講ずることに大きく寄与した。

第 5 電子出版に関する研究を様々な観点から展開し、出版技術の発展に対処できる対応方を提示し、未来の出版が目指すべき方向について研究を進めることになった。さらに電子出版の登場に対して消極的に対応するのではなく、出版領域の拡張の契機として柔軟に取り入れることによって出版パラダイムの変化を模索することを主張した。

このような考察を通じて我々は韓国出版学会を中心に展開された出版学の研究成果が実に多様で、その点数も多いということを確認することができた。相当数の志ある出版学研究者たちが各々のテーマを深度深く、現実感あふれる形で調査、研究し、未来の方向を提示してきた。これからも韓国の出版研究者たちは未来志向的な姿勢で、新しい課題に対し、斬新な研究成果をあげていくことは間違いないであろう。

(筆者：東元大学教授 / 訳：文ヨン珠 (Moon Youn Ju))